様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　６月　２４　日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：２００６～２００８
課題番号：１８７２００９３
研究課題名（和文）　英米における日本庭園像の変遷：
１９世紀末～２０世紀前半の雑誌と画像の分析を中心に
研究課題名（英文）　The image of Japanese gardens in the West: the analysis of the portraits of Japanese gardens in the Western magazines from the late 19th to the early 20th century.

研究代表者
片平（真鍋）　幸（KATAHIRA (MANABE) MIYUKI）
桃山学院大学・国際教養学部・講師
研究者番号：30414030

研究成果の概要：
本研究では、対象を１９世紀半ばから２０世紀初頭のイギリスとアメリカの雑誌記事に絞り、これらの媒体にあらわれる日本庭園に関する記事と画像の所在を調べ、網羅的に収集をおこなってきた。日本庭園がヨーロッパをはじめ海外に紹介されるようになったのは１９世紀末頃であるが、その伝達プロセスについてはこれまで十分に検証されてこなかった。本調査では、そのプロセスを明らかにし、欧米における「日本庭園像」の形成を考察するために必要な資料を収集することができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,300,000	0	1,300,000
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,700,000	150,000	2,850,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：各国文学・文学論
キーワード：日本庭園、１９世紀イギリス、２０世紀アメリカ、造園学、交流史

１．研究開始当初の背景

これまで庭園に関する研究は、主に様式の変遷や作庭時代の考証などに重点がおかれてきた。特に農学部を中心に蓄積されてきた国内の庭園研究では、「日本庭園」がどのように記述され、伝達されていったのかという「受容」の側面への関心は十分に払われてこなかった。さらに、「日本庭園」がどのように海外に紹介されたのか、そこには西欧における「日本」イメージとどのような関わりがあるのかなど、文化史的あるいは交流史的な観点からの考察は十分になされてきたとはいえない。

一方、美学や美術史の分野では、こうした交流史的なアプローチの研究が絵画や造形芸術を対象に行われてきている。西欧の「非

西欧」に対する眼差しと、その眼差しに対する「非西欧側の自覚」が、美の概念や評価基準の規定に関わっていることが多くの研究で報告されている。このような関心とアプローチは本研究が目指すものであるのだが、これらの諸研究では「日本庭園」を対象としたものは決して多くなく、美術や美学の分野の研究の対象として、「日本庭園」が十全に扱われてきたとは言いがたい。つまり、研究開始当初は、交流史的な観点からの日本庭園研究が、農学部などの分野だけでなく、美術や美学の分野でも非常に少ないというのが現状であった。

しかし日本国内の庭園研究には、西欧からの眼差しが時に重要な役割を果たしていたことが、その言説の系譜から指摘できる。これは西欧の眼差しとその眼差しに対する国内の研究者たちの応答が、日本の庭園研究史の重要な要素の一つであったことを示している。

欧米で日本庭園がどのように理解されているのかについて、日本国内の庭園研究者たちは、つねに自覚的であった。つまり、欧米諸国における「日本庭園」への関心の所在やアプローチの変遷をめぐる諸問題は、欧米の「日本イメージ」との関係性だけに限られるものではない。それはひいては、日本国内の庭園研究の動機づけや背景の系譜もまた明らかにするものである。

以上のような関心から、本研究では、欧米にどのように日本庭園が紹介されていったのか、そしてそれはどのように日本国内に影響を及ぼしたのかを明らかにすることを目指すこととした。

ヨーロッパで開催された万国博覧会などを契機として、日本庭園が海外に紹介されるようになるのは１９世紀末頃である。これらの万国博覧会をきっかけとして「日本庭園」への関心がヨーロッパで高まっていくのだが、本研究を開始した当初は、当時の状況を伝える媒体のなかで、庭園や園芸雑誌については、その種類や所在などについて不明な点が多いというような状況であった。

万国博覧会で展示された日本庭園に関しては、これまでの研究などによって、当時の様子などが明らかにされ、報告がなされているが、その前後にみられる一般的なレベルでの「日本庭園」への関心については、広範囲にわたることもあり、調査の対象とされてはこなかった。

従って、研究を開始した当初は、当時の状況を伝える一次資料は、イギリスやアメリカに散在していることのみを把握している状況であった。どのような雑誌に、日本庭園に関しての記事や画像が、どのような経緯で紹介されていったのか、関連雑誌の所在などについてはこれまでの庭園研究の対象からはずれていたために、海外の日本研究機関や庭園研究機関に問い合わせることから始めなければいけないというのが現状であった。

２．研究の目的

本研究の目的は、欧米における「日本庭園」イメージが、どのような変遷を遂げたのかを明らかにすることである。まず、「日本庭園」についての情報がどのように伝わったのかを実証的に検証することを目指した。専門家や研究者に限定せず、広く一般的に共有されていたと思われる「日本庭園」イメージをできる限り再構築するため、１９世紀半ば頃から出版された庭園や園芸、そして建築などに関連する雑誌を対象として、それらにあらわれる記事と画像を網羅的に収集することとした。

具体的に目指した点は、以下のとおりまとめることができる。

（１） まず、イギリスやアメリカに散在している日本庭園に関する英文記事の所在状況を確認する。

（２） 次に、資料が集中的に所蔵されている機関を絞って現地に赴き、実際の資料を確認する。

（３） さらに、確認し得た雑誌を対象に、そこから網羅的に記事と画像を収集する。

（４） 収集した記事と画像を体系的に整理する。

（５） 収集した資料を分析し、欧米における「日本庭園」イメージの形成史について明らかにする。

上記の作業の対象としたのは、主に、１９世紀半ば頃から出版されていた庭園や園芸、そして建築関連雑誌である。これらの所在状況について、まずは海外の日本研究機関と庭園研究機関にインターネットや連絡調整を通じて確認し（1）、集中的に資料が閲覧できる機関であることが確認できしだい現地に赴き調査・収集したうえで（2）（3）、それらの雑誌の位置づけや性質などについても歴史的背景と照らし合わせながら明らかにすることも目指した。１９世紀半ば頃から出版されていた雑誌の当時の位置づけなどを調査しながら、広い読者層を対象としていたと考えられるものを絞ること、そしてそれらの雑誌を中心に、日本庭園に関する記事と画像を収集することとした。

記事と画像の網羅的に収集、いわば「量的

調査」をした後には、それらの「質的調査」、つまりは「日本庭園」がどのように記述されたのか、そこには歴史的な変化がみられるのかなどの分析も行うこととした（４）。

これらの一次資料を体系的に整理したうえで、「日本庭園」が１９世紀半ば頃から欧米でどのように伝達され、受容されていったのかの分析を試みた（５）。これらの分析には、記事だけでなく、画像もデータとしており、欧米における日本庭園への関心の変遷を視覚的にも明示することを目指した。これはまた、現代に通じる欧米の「日本庭園観」の形成プロセスを明らかにすることと繋がっている。

欧米での「日本庭園」イメージの変遷を分析する一方で、欧米での「日本庭園」への関心に対して、日本国内からはどのような反応がおこったのかについても同時に調査をおこなった。大正期から昭和初期にかけて出版のピークをむかえる庭園や園芸に関連する学会誌を調べ、西欧への眼差しが日本の庭園研究史にどのように関わったのかについても明らかにすることを試みた。

３．研究の方法

初年度は、まず資料の所在状況の確認調査から取り組んだ。資料の所在状況に関しては、収集や分析などの作業とともに、最終年度まで行うこととした。

はじめにハーバード大学ライシャワー研究所とコロンビア大学東アジア研究所日本資料センター、そしてロンドン大学 SOAS 校などアメリカとイギリスの日本研究機関を中心に、インターネットを通じて調査をおこなった。しかしこれらの機関では、イギリスやアメリカで広く読まれた庭園、園芸、建築関連雑誌を所蔵していないため、対象をイギリスとアメリカの庭園研究の専門機関に移した結果、該当資料を所蔵していることが明らかになった。

次にイギリスでは、英国王立園芸協会のリンドリー・ライブラリー、アメリカではダンバートン・オークスというそれぞれ庭園研究の専門機関を対象に、資料の所蔵状況の調査をおこなった。両機関とも、１９世紀半ば頃からの庭園や園芸に関する雑誌、その他、関連する文献等を所蔵していることが確認できたため、現地に赴き、資料収集を行った。

イギリスの王立園芸協会のリンドリー・ライブラリーの現地調査では、対象を『The Gardener's Chronicle』（１８４２創刊、調査対象は１９４１年まで）と『The Garden』（１８７２創刊、調査対象は１９２７年まで）、そして『The Gardener's Magazine』（１８７４創刊、調査対象は１９１６年まで）の三冊に絞り、これらの雑誌に掲載された記事と画像の資料収集と整理統合、照合作業を完成させた。

イギリスでは、リンドリー・ライブラリーでの調査と同時に、大英図書館が所蔵する庭園に関する資料や建築関連の雑誌などの調査も行った。大英図書館では、１７世紀に著された庭園に関する文献を所蔵しており、まずそれらの文献のなかで「非西欧」の庭園、インドや中国に言及している箇所を中心に調査をおこなった。また、１９世紀末から出版されている建築関連の雑誌についても通覧し、日本庭園に関連する記事の収集することができた。

アメリカでは、北米の庭園研究の中心となっているダンバートン・オークスという研究所の現地調査をおこなった。本研究所では、特に２０世紀初頭に刊行された庭園関連雑誌や機関誌を中心に所蔵状況の確認と資料収集を行った。特に、「アメリカン・ガーデン・クラブ」という庭園愛好家団体の機関誌を中心に、日本庭園に関する記事と画像を収集した。「アメリカン・ガーデン・クラブ」は１９３５年に訪日し日本各地の庭園を訪れており、メンバーによるその際の記録が機関誌に確認できる。この資料は、まだ日本庭園に関する情報量が少なかった当時のアメリカの読者達に、どのように説明がなされたのかを示す資料である。

アメリカでの現地調査では、ニューヨーク公立図書館が所蔵する雑誌も対象に含めることとした。ダンバートン・オークスが庭園や園芸、美術関連の文献に特化されているのに対して、ニューヨーク公立図書館では、広い読者層を対象としていた１９３０年代から出版された雑誌、とくに建築やインテリア関連の雑誌などを調査し、日本庭園に関する資料を収集することができた。

上記の機関を中心に網羅的に資料を収集した次の段階として、これらを体系的に整理統合する作業をおこなった。１９世紀半ば頃から２０世紀初頭にかけてのイギリスとアメリカで流通していた日本庭園に関する基礎資料のレファレンスの作成を試みた。

一方、国内では、千葉大学園芸学部が所蔵する大正期、昭和初期の資料の閲覧と収集をおこなった。対象としたのは、講義要覧や教務に関連する資料、そして文部省や農商務省からの通達など創立や学部設置に関わる資料と、造園学の成立に関連する資料である。大正期から昭和初期にかけての造園学という新しい学問領域の誕生をめぐる言説からは、欧米の庭園研究を参照したことがわかるが、それを示す一次資料の調査をおこなった。

最終年には、これまで収集し体系的に整理した資料を分析し、学会で報告をおこなった。

４．研究成果

平成１８年度から開始した本研究の成果として、まず１９世紀半ばから２０世紀初頭に出版された庭園や園芸に関する英文雑誌、特に『The Gardener's Chronicle』（１８４２～）と『The Garden』（１８７２～）、そして『The Gardener's Magazine』（１８７４～）から、日本庭園に関する記事と画像を収集したことが挙げられる。これらの雑誌は、当時の発行部数から、読者層が広範囲にわたっていたと推定されている。上記の雑誌における日本庭園に関する記事は、イギリスの一般的な庭園愛好者たちに日本庭園がどのように紹介されたのかを示す基礎資料であり、つまりは欧米における日本庭園イメージの形成を知る上で貴重なデータである。

また、１９３５年に訪日したアメリカン・ガーデン・クラブの様子を伝える機関誌をアメリカで通覧し、関連する記事と画像を収集することができた。１９３０年代とは、日本国内の庭園研究者が、欧文での庭園関連図書を出版するようになる時期であり、アメリカン・ガーデン・クラブの訪日にあわせた英文による日本庭園の概説書も出版されている。つまり、日本の研究者たちが西欧からの眼差しを自覚し、その眼差しへの応答としてこれらの出版を位置づけることができるのである。こうした動向の直接的なきっかけとなったアメリカン・ガーデン・クラブについては、庭園愛好家団体として知られているのみであったが、本研究の調査により、日本へきた経緯と日本での旅程が決定される経緯などについても明らかになったことは、重要な成果の一つである。

上述したように、これまで日本国内の庭園研究では、交流史的な関心が広く共有されていたとはいえず、そのため、日本庭園が欧米にどのように伝達されたのかを示す資料は、イギリスやアメリカに散在しており、所在の状況さえ不明な点が多かった。本研究では、いわば日本庭園の交流史の空白部分を埋める基礎的な資料を収集し、体系的に整理したといえるだろう。

これらの資料収集に関してイギリスの英国王立園芸協会のリンドリー・ライブラリーとアメリカのダンバートン・オークスからの協力を得られたことも成果といえる。

海外での資料収集と同時に、日本国内では千葉大学園芸学部が所蔵する大正期と昭和初期の創立やカリキュラムに関する一次資料の調査も成果の一つとして挙げることができる。千葉大学園芸学部は、日本国内で体系的な学問として庭園を教えた学校としてはもっとも古いものの一つであり、近代の学問としての造園学の成立を知る上で重要な一次資料の多くを所蔵している。しかしこれらの一次資料は、上述のように、近年の庭園研究の対象としてほとんど扱われてこなかった。本研究では、これらの一次資料を調査し、日本の造園学の成立経緯を明らかにするデータを収集することができた。これらの資料と欧米からの眼差しが、いかに日本の造園学の成立と関わっているのかについて分析するための基礎的なデータの収集をすることができたといえる。

こうしてイギリスとアメリカ、そして日本で平成１８年度から平成２０年度まで収集した資料は、これまで分断されていた庭園研究では見過ごされがちであった海外における日本庭園観の形成過程、「日本」イメージとの関連性など交流史的・比較文化史的な観点から日本庭園研究に寄与するものである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

１．片平幸「欧米における日本庭園像の形成：原田治郎の *The Gardens of Japan*」国際日本文化研究センター『日本研究』、査読有、第 35 集、2007 年 pp. 179-208

２．片平幸「「歴史性喪失のアイデンティティーへ」に対してのコメント」国際日本文化研究センター編『日本の伝統工芸再考』、査読無、2007 年 pp.84-87

〔学会発表〕（計１件）

１．片平幸「Popularizing Zen Gardens」Association for Asian Studies (アジア研究学会)、2009 年 3 月 27 日、シカゴ

〔図書〕（計１件）

１．片平幸「庭園をめぐるわび・さび・幽玄」鈴木貞美・岩井茂樹編『わび・さび・幽玄－日本的なるものへの道程』水声社 2007 年 pp. 449-479

６．研究組織

(1)研究代表者

片平(真鍋)幸(KATAHIRA(MANABE) MIYUKI)
桃山学院大学・国際教養学部・講師
研究者番号：30414030

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：